

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

## 福島県教育支援ボランティア報告

この日、午前中はあずま運動公園で学習会。震災直後は1000人以上いた避難者も、現在は220人。子どもも減った。学習スペースにやってきたのは3人。お絵かき姉弟と作文男の子。

- ・お絵かき姉弟。6才の弟は一人で茶色とオレンジ色のペンで森の中のカブトムシを描いた。陽気に独り言を言いながら。7才の姉は自分では描かない。描いてもらった絵に色塗りする。

「絵を描いて。猫、描いて。森、描いて。森の中にいる猫、描いて。」森の手前に背の高い草むら。そこに隠れているのは三毛猫。色塗りしながら「家の猫と同じだ。私、猫と犬と馬を飼ってた。全部メスよ。そうだ、宝物見せてあげる。」

ポシェットから動物の絵のマグネットを三つ取り出す。自分の猫と犬と馬の写真を撮ったと言う。

「猫は魚くわえているところ撮りたかった。ポトって落とされたの。これでもいいかーで撮ったの。猫と犬は預かってもらっているの。向こうの所。駐車場にいた猫？それ、たぶん私の猫。馬の名前はロックっていうの。そうポニー。乗って遊んだよ。落ちたこともある。地震の時、死ななかったけど、海で知らないうちに死んだの。いないから捜した。大変じゃなかったよ。たくさん歩いて大変だったけど。新しい馬を買ったの。同じ名前にした。津波は隣の家のところまで来た。津波見てから、弟は学校に行かなくなった。」

姉は表情を変えず、色塗りの手を休めず、ずっと話し続けた。



- ・作文男の子。この子は宿題になっている書きかけの作文を持ってきた。題は「友達と遊んだこと」。

原稿用紙1枚仕上げるのが目標。話を聞きながら書かせていこうとするが「わからん。」「忘れた。」「しらん。」で苦戦。それでも何とか仕上げて帰る。しばらくすると戻ってきて泣き出す。2枚書かないといけなかったのだ。ヒック、ヒックと泣きながら仕上げていった。

午後は遊び。同時に広場でNPOと福島大学生による「昔ながらの夏祭り」が開かれた。かき氷、

射的、風船釣り。こちらが用意した「割れないシャボン玉」で7人くらいが遊んだ。

- ・ひたすら吹いていた男の子。ストローで何度もシャボン玉をつついていて空にあげていたら「あれ、なんで割れないの？」と誘いにのったのは小学校三年生くらいの男の子。最初はシャボン玉を作れない。慣れると大きな玉を作ろうとする。妹も参加して飛ばした。妹が飽きても彼は続けた。「一緒に吹いて。」「これにくっつけて。」「互いのストローを近づけて吹いて、シャボン玉をひっつけたらどうなるか。「割れたね」「うわっ、ひっついた。」「大きくなった。」「おもしろいね。」「二つひっついたり、三つひっついたり。分子モデルのよう。くっついたのは時間がたつとビヨンと合体して一つになる。

彼は液を入れたカップにシャボンの大きな半球を作る。風にあおられブヨンブヨン揺れるが割れない。「これに吹いて。」「うわっ、はねる。見て見て、はねてるよ。」「もっと吹いて。」その半球に新しいシャボン玉がひつつく時もある。ビヨンと合体する時も。半球で、シャボン玉をはじけることもわかった。「氷あげようか？」手に持っていたかき氷を一さじすくって食べさせてくれた。氷の粒が細かくておいしかった。



- ・ひたすら割る子。風に吹かれて飛んでいくシャボン玉を追いかけてジャンプして、飛びついて、回し蹴りして、踊るように体を動かし続けて、空中を漂っているシャボン玉を割る小学校3年生くらいの男の子。シャボン玉を吹くことには関心をもたず、一言も声を出さずに、ひたすらシャボン玉を追って割る。彼にひかれて、妹も参加。友だちも加わった。彼らのためにひたすら玉を吹き続けた。液がなくなるまで終始無言で、一人になっても最後までこの子は遊んだ。

帰りの駐車場には、朝と同じ場所に同じ三毛猫がいた。係員が「どこからかやってきて、ここから離れない。」というその猫はオスだった。

ここに学習や遊びに来る子はまだいい。ストレスを発散できる元気をもっている。ある保護者は「鼻血がしばしば出る。成績も下がった。外に出るのが好きだった子が、誘っても『しんどいから行かない。』と言うようになった。」と低線量放射線の影響を心配していた。この不安をずっと抱えていかなければならない子どもたちがいる。いや待てよ、山形に連れて行った子はキャーキャー騒いでいた。でも、ここの子どもは外でも静かだ。はやく福島の子どもが外で思い切り遊べる日がくることを願う。

★この報告は四国ブロック4人の活動をまとめました。